

古代史年表

世紀	大陸	半島	列島
前5～4世紀	前9世紀(周代)～越に南下してきた犬戎だが、春秋戦国時代に中国南部にも留まれなくなり南海から北上 前473年 江南の呉、越王勾踐に滅ぼされる 前334年 越、楚に滅ぼされる		・犬戎の一支脈が近畿地方に定着＝葛城氏 ・江南系民族の出雲流入(さらに南越からも) ・呉・越・南越からの移民は、越の国(新潟県)にも流入 ・雲南の滇から月氏族(中央アジア遊牧民)が出雲に流入、大物主勢力となる(銅鐸文化)
前4～3世紀	前222年 秦の始皇帝燕を滅ぼす ・項羽と劉邦	・燕から亡命した衛満により、朝鮮候準「海中」に追放される	・大陸から半島を経て民族流入(弥生時代)、南西諸島が中心 ・北九州に燕の遺民を中心とした北方・大陸系勢力(銅剣・銅鏡文化)
前2世紀		BC108年 漢の武帝、衛氏朝鮮を滅ぼし楽浪他三郡を設置	・北九州中心に小国家群抗争～近畿まで及ぶ ・大物主勢の最盛期(北九州から近畿地方まで)、最終的に大和まで進出し葛城氏(少名彦)と共同統治し、越の国から関東地方まで支配するようになる
前1世紀		BC30年代句麗建国 BC57年辰韓(新羅の前身)興る(始祖は赫居世＝瓠公＝葛城氏が倭人であることを秘すため「新羅本紀」)	・邪馬臺国奄美大島に(「魏志倭人伝」は3世紀と前1世紀の状態を併記)、卑弥呼はフミコ。最盛期には、北九州まで支配下に ・大和葛城氏、後進の大物主勢に押されて日本海側から辰韓に至りここを統治(大国主は新羅と高志の国を国引き)
1世紀	・成立したての後漢、周辺諸国に動乱をもたらす ・45年頃シルクロードの争乱あり ・亀茲の亡命勢力が数十年後南海を北上し半島～列島に至る	32年 後漢、大武神を句麗王に任命 37年 大武神中国の楽浪郡を滅ぼす 44年 後漢、楽浪郡を取り返す→大武神は倭へ亡命 57年 脱解＝大武神が新羅を篡奪し辰韓王に 73年 辰韓の脱解、亀茲系加羅国や倭人と戦う(80年死)	・句麗王大武神、大物主勢の後援で丹波に到着後、北九州の諸国を滅ぼし一大強国奴国を建国(「記紀」にいう神武の最初のモデル) ・奴国王が漢から金印「漢委奴国王」、(後漢は前漢を篡奪した王莽のもとの大物主政権は認知できない) ・南九州に定着した亀茲系民族が、半島の亀茲系加羅国と連合し、脱解＝大武神の奴国を圧倒(「記紀」のいうニニギ系天孫降臨型神武)
2世紀前半		121～146年 遂成＝奴国王帥升クーデターで、句麗王に納まる	107年 奴国王帥升後漢に生口160人を献上(大隅半島から北上する亀茲系民族の圧力が大きくなったため)するも、後漢の支援はなし→句麗へ亡命

古代史年表

世紀	大陸	半島	列島
2世紀後半	<p>172年 江南の巫術者の乱を呉の孫権が治める→許昌父子が列島へ亡命(その娘が卑弥呼となる)</p> <p>182年黄巾の乱→後漢の勢力衰退し、遼東には公孫氏</p>	<p>154年 辰韓は亀茲系加羅国王に取って代わられる</p> <p>173年 倭の女王卑弥呼が加羅国に使者を送る半島南部と列島の卑弥呼勢は公孫氏の配下に</p>	<p>・亀茲系民族が北九州を制圧し、その後瀬戸内から大和盆地に入る。この頃から倭国ではニニギ系勢力と旧勢力との戦乱始まる(「後漢書」、180年頃～纏向遺跡が急速に隆盛に向かう)</p> <p>・この頃伊都国が北九州の最大勢力(ニニギ系の主力は大和へ移動、伊都国は卑弥呼のカリスマ性が必要だった)</p> <p>・日本海側には東倭、九州には狗奴国があつて、半島の狗邪韓国などと連合しニニギ系と大乱に(ニニギ系は、対外的な認知がないため権威に欠けた)→伊都国王は卑弥呼を象徴的倭国王に担ぎ出す</p>
3世紀前半	<p>220年三国(魏・蜀・呉)時代始まる</p> <p>238年魏の司馬氏遼東公孫氏に勝利、238年魏の明帝死</p>	<p>・巫術者集団に通じる句麗・辰韓・加羅・邪馬臺国はこの頃遼東の公孫氏の支配下にあった。</p> <p>228年 高句麗王に東川王(列島日本海側勢力東倭や狗奴国・魏の司馬氏とも連合、公孫氏・幽州毋丘儉とは対立)</p> <p>245年 毋丘儉、東川王の高句麗を一旦滅ぼすが、東川王は辰韓との戦いに勝つ→毋丘儉、東川王勢を壊滅→東川王の列島亡命</p>	<p>238年 倭の女王卑弥呼魏に献上品→卑弥呼は大武神以来初めて中国明帝から親魏倭王と認められる(倭人伝では仮受、本記では末梢)</p> <p>240年 魏の司馬氏、東倭国王を倭王に任命</p> <p>247年 東川王、東倭や狗奴国と連合して邪馬臺国を攻め、卑弥呼死亡→東川王が男王となるが諸国乱れ、邪馬臺国は臺與を形式上の女王とした東川王・東倭・狗奴国連合に組み込まれる→その後「東川」王は「東遷」し瀬戸内から安芸に向かうが、248年没(「記紀」の神武東遷の話、神武の三番目のモデル)</p>
3世紀後半	<p>255年 毋丘儉、司馬氏に殺される</p> <p>263年 蜀滅亡</p> <p>265年 司馬氏が魏を篡奪して晋を建国</p> <p>280年 呉滅亡</p> <p>・この頃晋内部の勢力争い熾烈、北東部では遊牧騎馬民の五胡十六国が勃興</p>	<p>250年代、辰韓は神武=東川王勢の支援のもとに味鄒が王に即位</p> <p>259年 東川王の子が魏に圧勝し、高句麗再興→この頃までに半島中・南部はほとんど神武勢力下にあり、列島を含む極東地域は東川王の子or配下の支配下に</p> <p>※「倭人伝」に大倭の国名登場(大倭はヤマトと読むが、大和に定着した神武勢が東倭と邪馬臺国の二つを合体させて、列島全体の統治者を自称したもの)</p> <p>※邪馬臺の臺も古音ではトと読む場合があり、ヤマタイではなくヤマトが正しい読み——韓国語で古い(邪)南(馬)の中心(臺)という意味</p> <p>※臺與は「記紀」から総合判断すると、最初に神武と結ばれ、その死後息子のタギシミと結ばれたが、タギシミが綏靖に殺されたため綏靖と結ばれた</p> <p>※「古事記」の神武東征とヤマトタケルの東征の話はダブっている</p> <p>286年 匈奴の一派たる鮮卑の慕容氏が夫余を攻め、夫余の亡命者は高句麗(これも出自が夫余)に逃れる→さらに一部は佐渡から越を経て関東北部に入るこの頃、慕容氏が馬韓全域を支配し百済が成立、さらに高句麗も制圧</p> <p>298年 匈奴の劉氏による百済攻め→劉氏はさらに南下し北九州へ(その後中国東北部・半島・列島の勢力を率いて、洛陽陥落へ向かう)</p>	<p>・神武=東川王勢は255年まで7年も安芸にとどまっていたが、256年には吉備に移る(5世紀頃まで本州西南地方の大国は、出雲・吉備・大和だったから、大和が簡単に攻略できない場合は、吉備を首都としてもよかった。また備前車塚古墳=前方後方墳が東川王の墓)</p> <p>・神武=東川王勢は8年間吉備に留まった後、264年に味鄒の支援を得て大和に進軍し1年余りで制圧(「書記」のニギハヤヒ勢は、半島加羅国と同族で味鄒の出自と同じなため、神武勢は滅ぼすわけにできなかった。ナガスネヒコが大物主勢)</p> <p>266年 神武勢2代目綏靖が晋に朝貢(「晋書」、神武朝はこの後第3代安寧まで)</p> <p>※懿徳・孝昭・孝安(武埴安彦)・孝霊(オオタタネコ)・孝元(401年没)・開化(461年没)までが大和の局地的統治権を持つ三輪王朝で、「書紀」では2代綏靖以降の8人は名のみ残した=欠史八代</p> <p>この頃、慕容氏系百済勢が瀬戸内吉備地方に進出し、神武勢を脅かす→島根・岡山・広島を支配していた神武勢を島根に駆逐(「書記」にいうスサノオが百済勢、ヤマタのオロチが神武勢)</p> <p>292年 高句麗西川王が慕容氏に追われ列島へ亡命し、大和盆地へ=「記紀」にいう第4代懿徳に</p> <p>290年代半ば、匈奴の劉氏による列島支配→崇神朝成立。しかし大彦を中心とする崇神勢は伝統的勢力を根絶やしにするわけにはいかず、神武勢について祭祀権を臺與に、大和の局所的統治権をオオタタネコに与え、形式的倭国王として存続させた(「書紀」では、はじめ天照と日本大國魂神を同じ神殿で祀ったが、共に住むわけにいかなくなり、天照を豊鋤入姫=臺與につけ倭の笠縫の地に祀る)</p>

古代史年表

世紀	大陸	半島	列島
4世紀前半	<p>・鮮卑の慕容氏が遼東を支配</p> <p>311年 匈奴の劉氏により洛陽陥落(晋の実質的滅亡)</p> <p>329年 匈奴の劉氏滅亡</p> <p>336年 慕容皝、弟の仁に勝ち、息子の儁を列島対策に派遣</p> <p>337年 慕容氏が燕を建国し、この後100年以上にわたり北東アジアを支配</p>	<p>318年 高句麗美川王、慕容氏に敗北→中国中心部を除き半島・列島は慕容氏の支配下に転換</p> <p>346年 仲哀半島を制圧し、百済近肖古王に</p>	<p>300年前後 大彦(崇神天皇)は、大和の神武勢を吉備津彦とともに制圧したが、大和盆地を都とするわけにはいかず、先住の夫余系(香島の神)に多くの贈り物をして埼玉志木(稲荷山古墳)に本拠、関東・東海から中国・日本海側・九州を支配。しかし大和には東川王以来の神武系が残存</p> <p>318年 劉氏系崇神の死～慕容氏系垂仁への転換 垂仁は成長後遼東に在って半島・列島を統治したが、列島については東部を大彦勢・西南部を五十瓊敷(イニシキ)勢の共に崇神系に委託</p> <p>337年 慕容儁=ホムツワケ=ヤマトタケル=景行の列島制覇開始、最初に大和盆地に入り、天照大神を祀る祭祀権を奪取(豊鋤入姫=臺與系大和勢に祀らせていた天照を、倭姫に替えて祀らせる「垂仁紀」)</p> <p>346～347年 慕容儁=ヤマトタケル=景行は困難な戦いの末関東の夫余勢をはじめ列島の主要勢力をほとんど支配下に置いたのち遼東へ帰る→子の仲哀に委ねる=景行朝の終わりと仲哀朝始まり ・ヤマトタケルが去って求心力がなくなると、各地に大勢力(近畿忍熊朝等)が勃興</p>
4世紀後半	<p>360年 慕容儁死→劉氏系の符堅が覇を唱える(後の秦国王)</p> <p>369年 前燕滅亡に際し、慕容儁の子暉が近肖古を百済王、竹内宿禰を百済の後継者かつ倭王に任じて援軍を依頼</p> <p>380年 秦国王符堅の従兄弟で東北部を支配していた符洛、符堅に反乱し甘肅に流さる→その後列島へ亡命(インドから南海を北上して大隅半島へ)</p> <p>385年 符堅の秦国滅ぶ→慕容氏による後燕・西燕など北東アジア激動</p>	<p>366年 新羅が神功勢を退けたことを受け、新羅・百済(近肖古=仲哀)の半島中南部連合成立</p> <p>369年 神功勢が半島南部を制圧し、竹内宿禰は近肖古の後継者(近仇首)として百済に入る</p> <p>375年 竹内宿禰は百済王近仇首となる</p> <p>384年 符洛=応神、百済を攻略し枕流王に</p> <p>385年 枕流王=符洛=応神、甘美内宿禰を大和忍熊を滅ぼした功により百済辰斯王につけ、自身は大和へ</p> <p>386年 百済辰斯王、東晋に朝貢→応仁との関係悪化</p> <p>386年 後燕に敗れた高句麗で、後燕の談徳が立太子</p> <p>392年 談徳が高句麗広開土王に(中央アジアパルチア系の安氏で、北魏と後燕慕容垂の間を取り持つ)</p> <p>396年 高句麗広開土王と倭王応仁=符洛との攻防続く</p>	<p>362年 父儁の死後、新羅と協調しようとする仲哀は、新羅攻撃を主張する神功皇后・竹内宿禰と対立し、百済に退去</p> <p>364年 神功勢の第一次新羅征討→完敗 (※神功の出自は、匈奴の劉氏に仕えた高句麗系の陳安=息長宿禰が劉氏に追われて列島へ帰ったあと、崇神系丹波道主勢の女との間に生まれた。陳安は仲哀と神功に東アジア制覇の夢を賭けた) (※竹内宿禰=成務天皇、慕容儁=ヤマトタケル=景行の四男で行動を共にするが、仲哀が来てからは仲哀に仕える。神功一族が新羅攻撃を主張した時神功側につき、神功皇后と結ばれる)</p> <p>369年 神功勢の第二次新羅征討(「記紀」が成務天皇を無理やり押し込んでいるのは、慕容暉が竹内宿禰を倭王として認知したため)</p> <p>382年 神功勢、ソツヒコに新羅討伐を命ずるも失敗。 同年 列島に着いた符洛=応神は筑紫で神功勢と連合し、大和の忍熊勢を討伐し、大和に定着(風評を利用して符洛が死んだことにし、忍熊勢を油断させて勝利、この時の将軍が竹内宿禰=近仇首の子甘美内宿禰=辰斯王)</p> <p>384年 竹内宿禰=百済王近仇首、北九州で再起を図るも息子の甘美内宿禰に密告され敗る</p> <p>389年 神功皇后没</p> <p>391年 符洛=応神、高句麗側に寝返った百済辰斯王への報復のため、半島侵攻(広開土王碑)→392年、百済王に子の阿華</p>

古代史年表

世紀	大陸	半島	列島
5世紀前半	<p>409年 後燕滅亡・北魏道武帝死→北燕王遼西から高句麗へ勢力拡大</p> <p>435年 北燕滅亡</p>	<p>404年 後燕・応神＝符洛・百済阿華連合軍と高句麗広開土王の戦いは、広開土王の勝利に終わる→後燕も後に滅亡→東アジアは北魏と高句麗を軸にして展開していく</p> <p>413年 広開土王没(「高句麗本紀」)→北魏は頼りにならず、北燕勢に高句麗を併呑されつつあった広開土王は、自らの力で擁立した王が支配する倭で捲土重来を期すことを決意し、新羅に移り、この年東晋に送使(「晋書」)</p> <p>435年 北魏に認知された長寿王が高句麗王に</p> <p>この頃、高句麗長寿王と新羅王訥祇＝允恭の熾烈な戦いが続行</p>	<p>403年 応神＝符洛没(後燕をバックに、子の阿華王とともに、広開土王に最後の戦いを挑む)</p> <p>404年 応神＝符洛の子宇治天皇</p> <p>409年 広開土王、北魏の亡命者を連れて列島に来、淡路島・難波を拠点にいったん帰国(411年)</p> <p>413年 倭王仁徳＝広開土王、東晋に送使</p> <p>416年 倭王仁徳＝広開土王再度渡来→応仁の子宇治天皇を死に追い込み419年以降応神朝を篡奪</p> <p>425年 北魏に対抗するため、仁徳と北燕(高句麗)が同時に宋に朝貢</p> <p>427年 仁徳＝広開土王没、この頃北魏勢が次第に列島を侵蝕</p> <p>428年 百済膳支王＝履中天皇、仁徳没後の列島混乱のすきを突き、倭王として復帰(餘映は阿華王時代に百済から列島に来たが、宇治天皇時代に膳支王として百済に帰り、さらに履中＝去来穂別として倭国に復帰)</p> <p>432年 反正天皇 (仁徳没後安康・雄略が乗り込んでくるまで、列島西南は履中とその息子が支配し、大和盆地には仁徳系の反正朝が局地的倭王として残存。一方、新羅王訥祇は高句麗王として宋に送使しながら、倭王済＝允恭天皇として宋に認知されていた) ※倭の五王とは、讚＝仁徳、珍＝反正、済＝允恭、興＝安康、武＝雄略・武烈)</p>
5世紀後半	<p>この時代北魏は、かつて北魏に滅ぼされた北燕の馮氏一族が実質的に支配、また南朝宋も弱体化し、諸国騒然</p> <p>479年 宋滅亡～斉興る</p> <p>490年 北魏が北東アジアから退き、代わりに中央アジアエフタル(嚙唃)系が台頭</p>	<p>456年 安康、高句麗長寿王と連合して、百済を制覇</p> <p>457年 安康、高句麗長寿王と連合して、新羅王訥祇を暗殺→この後新羅は列島の餘昆(昆支)＝雄略・百済連合の支配下に</p> <p>464年 昆支＝雄略、半島南部も制圧し宋に送使→この後東北アジアは、高句麗長寿王と雄略・百済連合との対決を軸に展開</p> <p>476年 高句麗長寿王百済を滅ぼす→476～7年、百済も攻略</p> <p>482年 昆支＝雄略の子牟大、百済東城王に</p> <p>491年 高句麗長寿王没→次の王が新羅・百済をたびたび攻める</p> <p>この頃 繼體勢が、シルクロードからゴビ砂漠を通り、北魏の妨害もなく高句麗に至り、高句麗と連合して半島中南部と列島を攻略</p>	<p>456年 安康、高句麗長寿王と連合して、履中とその息子を滅ぼし倭王に納まる</p> <p>461年 安康、大和盆地の伝統的局地勢を滅ぼす→献上した女を殺された百済王、安康への報復のため餘昆(昆支)を倭に派遣(出自不明)</p> <p>462年 安康殺さる(外地から来て直ちに倭王になったため、地元勢への配慮に欠けていたと同時に百済の意向もあり)</p> <p>463年 昆支(餘昆)＝雄略、吉備勢を滅ぼす→470年代以降、列島を代表するただ一人の倭王に</p> <p>477年 雄略没(長寿王を後ろ盾とする、再起した吉備勢に滅ぼされる)</p> <p>480年 雄略の子清寧即位</p> <p>482年 雄略系(清寧・百済東城王連合)に対し、高句麗長寿王系(履中系のオケ・ワケ)の戦い→485年顕宗・488年仁賢天皇に)</p> <p>・この頃 高句麗の援護のもと、繼體勢が高句麗領から海上に出て列島に渡り福井を拠点に→新羅・百済東城王連合を高句麗と挟撃</p>

古代史年表

世紀	大陸	半島	列島
6世紀前半	<p>この頃、北魏は遠く洛陽にあり、南朝梁は軍事的に弱体→半島・列島の混乱</p> <p>549年 南朝梁の滅亡・東魏滅び北齊興る→南北朝の大動乱</p>	<p>500年 繼體が新羅を攻め、新羅を篡奪(智証王)</p> <p>501年 百濟東城王、その暴虐ぶりから家臣に刺される</p> <p>514年 任那の伴跋(はへ)勢=武烈、今度は逆に新羅智証王=繼體を倭国に追い、新羅法興王に</p> <p>・この頃、半島混乱状態</p> <p>529年 高句麗安蔵王、百濟に侵攻し、そのまま南下</p> <p>531年 高句麗安蔵王、繼體の部下毛野臣を味方に引き込み列島に渡る</p> <p>540年 宣化、新羅法興王を滅ぼし、新羅真興王に</p> <p>同年 百濟聖(明)王、高句麗に敗北し倭国へ(この頃、半島では東魏を後ろ盾とした高句麗の南下が頻繁となり、百濟・新羅・倭国は連合して抵抗)</p> <p>548年 高句麗で王位継承をめぐる内乱→細群勢が倭国へ亡命→半島・列島情勢複雑化、聖(明)王百濟と倭国を揺るがす</p>	<p>502年 百濟東城王=雄略の子牟大(=武烈天皇)列島に帰り、仁賢を葬る→しかし高句麗の支援する新羅智証王=繼體勢に追われ、506年倭国を去り、任那の伴跋勢となり半島復帰)</p> <p>515年 繼體朝=新羅智証王→この後倭国王として列島と任那南部を支配下に置き、百濟とは親交、新羅法興王=武烈とは対立</p> <p>531年 繼體の部下毛野臣が高句麗と通じて裏切り、半島南部から近畿に入り、高句麗安蔵王とともに熾烈な戦いの末534年大和に入る→倭王安閑となる</p> <p>535年 安閑没(当時の倭国大和地方は、仁賢の娘春日山田皇女・武烈以来の旧臣大伴大連金村・物部大連鹿火の連合政権、安閑は旧勢力のクーデターで滅亡→新羅南部に亡命していた繼體の二子を擁立=536年宣化朝、この背後に蘇我稲目→この年物部大連鹿火没→旧勢力が崩れ、次第に蘇我稲目を中心にする欽明朝へ移行)</p> <p>539年 宣化、北九州から新羅を滅ぼす(「書紀」では539年没)</p> <p>541年 百濟聖(明)王、宣化の了承のもと倭国へ一時亡命、のち倭国王を篡奪して欽明朝→宣化=新羅真興王とは、任那の所有をめぐる最初から対立</p> <p>・この頃、欽明=聖(明)王は、百濟にあって高句麗戦と新羅対策に忙殺→細群勢の一人餘昌(後の敏達)が倭国内で力をつける</p>
6世紀後半	<p>・この頃、北魏の勢力が弱まり、騎馬遊牧民で匈奴の突厥が極東へ進出→匈奴のエフタルが急速に衰えた後の西・北・東アジアを6~7世紀にかけて席卷</p> <p>東突厥は中国、西突厥はササン朝ペルシャに進出→本拠地に残ったのが達頭</p> <p>581年 隋建国</p> <p>583年 東西突厥の分裂→585年隋の策略のもと、東突厥の阿波が守屋とともに倭国へ逃亡</p> <p>588年 南朝陳、隋により滅亡→隋の敵は突厥勢のみとなる</p> <p>598年 西突厥の達頭可汗領最大に→隋と一進一退戦いながら東へ移動、599年には渤海に至る</p>	<p>553年 百濟太子餘昌、倭国から出て高句麗に勝利</p> <p>554年 百濟聖(明)王戦死→餘昌(敏達)が557年百濟威徳王に</p> <p>562年 新羅真興王=元宣化、百濟・倭国連合に勝利、次いで高句麗も占領(倭の狭手彦軍による)</p> <p>・この頃、高句麗と境界を接するほど南下してきた東突厥が、軍事援助を通じて高句麗内で発言権強める</p> <p>576年 新羅真興王没</p> <p>598年 高句麗、達頭可汗と協力し百濟を制圧→百濟威徳王没</p> <p>599年 達頭可汗、百濟法王に→600年没とされるが実は倭国に渡り、倭国法王(聖徳太子)になる</p>	<p>554年 欽明朝事実上終焉(「書紀」では571年まで存続したことになっているが、その間倭国の実権を握っていたのは蘇我稲目。蘇我氏は元々百濟の出身で、稲目は百濟聖(明)王の子を百濟に戻し、百濟の餘昌を高句麗王にして、倭国は王不在のままにしたかった。570年没)</p> <p>572年 敏達朝=百濟威徳王時代(新羅・百濟間で、倭王の座を巡る争いが熾烈化し、百濟出身の稲目は、百濟威徳王に統治を委託)</p> <p>・この頃、高麗人の来倭多数(「書紀」)=高句麗人ではなく、沿海州・中国東北部を経て日本海から越へ到達した突厥(倭と百濟を兼任した敏達が、新羅真興王と対決するため、西突厥の軍事力を招く)</p> <p>575年 新羅、倭国を侵攻するも、突厥勢により敗退</p> <p>576年 後の推古天皇が立后=ようやく敏達朝が安定し、威徳王は蘇我馬子に倭国の統治を任せ、自らは百濟へ帰る</p> <p>583年 新羅を駆逐した功績により発言権を増した西突厥勢(物部贄子等)、本国の達頭可汗の命により、新羅・百濟の討伐を目指す(聖徳太子もその一族)→敏達=百濟威徳王と決裂へ</p> <p>585年 敏達朝終焉(「書紀」)=阿波・物部守屋等突厥の侵入で、百濟威徳王の権威が倭国に及ばなくなった時(「書紀」では、この年穴穂部皇子=阿波が「天下を取らんとす」)</p> <p>587年 馬子・推古勢の用命朝(すぐ没)→馬子・推古勢(聖徳も)が、穴穂部=阿波・守屋勢を討伐(倭国に滞在していた、西突厥の達頭可汗の援軍により)</p> <p>591年 崇峻朝→592年馬子に殺さる(百濟威徳王は高句麗と親和関係にある西突厥が背後にあるため、馬子を討伐できず)</p> <p>※この頃極東では、高句麗と倭国が隋に反抗、百濟は時により態度を変え、新羅は中国寄りとなる傾向</p> <p>※この頃の蘇我氏の領域は、近畿・中国と関東の一部</p>

古代史年表

世紀	大陸	半島	列島
600～640年	<p>607年 西突厥・突利・高句麗・倭国連合対隋の煬帝という図式</p> <p>618年 隋滅亡、唐興る→この後、反唐を貫く諸勢力の主相次いで没し、隋に認知された倭王タリシヒコにも影響</p>	<p>※「書紀」では、倭王タリシヒコは「天皇」ではなく聖徳「太子」としてしか記述されない＝タリシヒコの後継者山背大兄一族が、孝徳・天智に殺されたから。倭王を殺害したものが王になったのでは万世一系にもとり、また歴代天皇は天智の血筋を引く者が正統だから改竄された</p> <p>※621年以降、7世紀末まで唐は新羅を通じて倭国に内政干渉するが、それが白村江の戦いに発展する</p> <p>※舒明朝とは百済武王が投影されたもので、実際の倭王山背王朝を史上から抹殺するため「書紀」が創作</p> <p>・この頃、馬子の優柔不断な態度が、高句麗・百済・新羅三国の倭国をめぐる対立に、いっそう拍車をかける</p>	<p>600年 達頭可汗、百済を出発し、倭国勢を討伐しながら北九州～瀬戸内～明石に上陸(「豫章記」)→601年播磨斑鳩寺を拠点に反対勢力を討伐→馬子・推古の了承を得て、605年倭王を篡奪＝タリシヒコとして即位(蘇我氏の独裁政権終焉)</p> <p>607年 遣隋使小野妹子→隋の煬帝が達頭＝倭王タリシヒコと和解</p> <p>621年 唐が新羅を通じて、倭国に政治介入を開始→倭王タリシヒコ＝聖徳太子失踪(唐に帰順したい馬子・推古勢と対立し、以後不明)</p> <p>622年 唐の使者来倭→タリシヒコの遺児山背の即位に反対し、田村皇子(舒明)＝百済武王を推薦するが、馬子はかろうじて親唐派を抑え、推古を倭王にする妥協案で乗り切る</p> <p>626年 馬子没→推古は子の竹田皇子を倭王にすべく、蝦夷と対立する摩理勢を味方に引き込んだが、敗れる(628年推古没)</p> <p>630年 山背王朝、これに反対するのが高句麗と結ぶ蘇我倉麻呂</p> <p>633年 山背王朝、対唐外交に失敗</p> <p>634～5年 蘇我倉麻呂と結ぶ高句麗太陽王(軽皇子後の倭王孝徳＝百済義慈王)が、倭国にもう一つのタリシヒコ系勢力として出現</p> <p>637年 唐を中心に、新羅・百済・山背倭国連合が再編成されかかり、軽皇子・倉麻呂勢が反乱するも敗る</p>
641～663年	<p>この頃、唐は国内平定、突厥・半島三国も朝貢</p> <p>649年 唐太宗没→唐による高句麗攻めは休止</p>	<p>641年 武王没し、百済王に義慈＝軽皇子、背後に高句麗の蓋蘇文と倭国の東国蝦夷軍勢の力</p> <p>※「書紀」ではここで舒明朝終わりとし皇極朝とするが、山背王朝が644年まで続き、皇極朝は存在しない</p> <p>※皇極は百済武王＝舒明の後(齊明)であり、武王死後の内乱の時息子の翹峽(中大兄)と共に追放、またこの年、百済大佐平智積(中臣鎌子)→いずれも倭国へ</p> <p>642年 高句麗蓋蘇文のクーデター→太陽王の子宝蔵王が高句麗王に</p> <p>645年 唐太宗、高句麗攻めに失敗→極東は百済義慈王の一人勝ち(高句麗は子の宝蔵王、倭国は山背・古人ともいなくなる)</p> <p>647年 蓋蘇文、謝罪のため入唐、以後15年間不明</p> <p>654年 金春秋(親唐派)新羅武烈王に</p> <p>655年 新羅武烈王の依頼により、唐高宗が東アジアへの全面戦争再開→660年百済滅亡・663年白村江での倭国敗退・668年高句麗滅亡へ</p> <p>660年 唐・新羅連合軍により百済義慈滅亡</p> <p>661年 新羅武烈王没</p> <p>663年 唐・新羅連合軍により倭国(大海人＝蓋蘇文)敗退＝白村江の戦い</p>	<p>644年 山背王朝滅亡(「書紀」では蘇我入鹿が主犯としているが、実際は軽皇子＝百済義慈王＝後の孝徳が高句麗蓋蘇文＝後の大海人と組み、中臣鎌子＝百済智積が実行犯)</p> <p>645年 古人大兄即位(蓋蘇文等外国勢は、山背王朝滅亡の主犯が入鹿であるとするため、先ず蘇我蝦夷の念願だった古人を倭王につけ、その後すぐ入鹿を殺し古人一族も殺害＝乙巳の変)</p> <p>※主役は中大兄といわれているが、軽皇子も大海人＝高句麗蓋蘇文もいた。このため中大兄は直後に即位できなかった</p> <p>645年 孝徳即位＝百済義慈王(義慈はこの間百済を不在にし倭国に滞在、親唐派の玄理が、前妻であるタリシヒコの娘齊明を倭王にし大海人＝蓋蘇文と共に倭国を専断する意図を阻止するため)</p> <p>650年 白雉朝(孝徳は子の孝を倭王に中大兄を太子に任じ、百済へ)</p> <p>・この頃から、百済・倭国・高句麗連合と唐・新羅連合の対立激化</p> <p>655年 齊明朝(中大兄・玄理・齊明・大海人等の反孝徳派が孝を追放、唐としても親唐派の玄理の前妻なら可とした)</p> <p>656年 高句麗より軍人81名来倭→対唐臨戦態勢に</p> <p>658年 大海人が関東蝦夷軍団を編成し高句麗の軍人に遼東を攻めさせている間に、百済義慈王系の有間皇子の乱を中大兄が有間殺して鎮圧→中大兄はこの後義慈王と対立し、大海人＝蓋蘇文がいかなる野望を持つか深く考えることなく、大海人の主導する対唐戦にのめりこむ</p> <p>659年 唐に反抗する大海人・親唐派に転換しようとする中大兄の遣唐使派遣さるも、両派の使者間で紛争おきる</p> <p>661年 齊明没(大海人が関与)→中大兄は大海人の主導する対唐戦に危惧を感じ、大和へ帰る、以後の戦いは大海人＝蓋蘇文単独</p>

古代史年表

世紀	大陸	半島	列島
664~672年		<p>665年 唐将劉仁輝、百済・新羅に続き倭国(中大兄)とも講和 ※劉仁輝は、大海人=蓋蘇文は間人を擁立して倭国を専断しようとしている。今倭国に無王状態が続けば内通する新羅と共闘して、倭王の地位を強奪するかもしれない。過去に唐に反抗したとはいえ、齊明の子である中大兄を倭王にしたほうが百済との関係も良くなると考えた→しかしその思惑はなかなか実現せず①百済の夫余隆がすぐに亡命②高句麗から大海人への援軍が続々倭国へ入ったため、中大兄もなかなか即位不可 668年 唐による三回目の高句麗征討</p> <p>670年 チベットの反乱のため、高句麗駐屯の唐軍引き上げ→大海人と共闘する新羅が半島全域支配→天智に不利 671年 唐、新羅の半島全域支配・倭国の大友即位援護のため、再び半島に出兵 ※大海人への半島からの援軍とは、671年11月に到着した半島土着の唐人たち(劉仁賢・郭務悰等)2000人、唐の正式な使者として入国し壬申の乱後帰国 ※大海人は、半島土着の唐人や新羅だけでなく、唐に反抗する西突厥・吐蕃(チベット)のほか、シルクロードの都市国家などとも連携して、ようやく倭王の座を勝ち取った</p> <p>672年 新羅文武王、唐に降伏し、唐軍半島から撤退</p>	<p>664年 大海人の擁立した間人皇女中宮天皇として即位~665年没(「書紀」では末梢)、この時大海人の救援のため新羅軍来襲</p> <p>667年 唐の使者が“筑紫都督府”へ ※唐将劉仁輝は、中大兄を倭王として承認する前に、唐の直接支配下にある筑紫都督に任じた(この年中大兄は、大和・対馬・讃岐に築城し、都を近江に移すが、この防御は、既に和睦した唐ではなく、大海人=蓋蘇文の高句麗勢に対するもの) 668年 中大兄=百済武王の子翹峽が唐に認知され天智として即位(大海人=蓋蘇文は、高句麗防衛のための戦力を割かねばならず、中大兄に対決するだけの武力に乏しかった) 669年 中臣鎌子没→天智・大海人間の調整役はいなくなり、武力闘争あるのみとなる 670年 天智拉致幽閉(~675年土佐にて没)</p> <p>671年 天智の子大友朝政(大海人は、半島から援軍が来るまで、僧侶姿になって吉野に一時撤退) 672年 郭務悰等が近江大津京に入ったことを聞いた大海人、吉野を出て天智朝を滅ぼす=壬申の乱 ※大海人の長男とされる高市皇子は、実は天智の長男で、乱が始まってから近江朝から大海人側に加担 ※当時の人々は、高句麗の将たる蓋蘇文=大海人が倭王になるとは夢にも思わなかった ※大海人は乱を通じて実戦には参加せず=乱自体を大友と高市の兄弟争いと思わせるため ※当の高市も実戦に参加せず=大海人が信用していなかったため</p>
673年~	<p>この頃、高宗没後則天(武氏)が唐の実権を握り、外交にあまり力を入れなくなる→突厥・吐蕃や契丹等の反乱相次ぐ</p> <p>698年 渤海建国</p>	<p>673~6年 天武・新羅文武王連合と唐の戦いで、唐敗る→この後唐は、国内の内紛に乗じて天武と新羅文武王を滅ぼす政策に転換 681年 新羅で倭国勢が唐に敗る→文武王倭国に亡命し、新羅は唐の支配下に</p> <p>※高市は、大津朝成立に不満な天武の後鳥羽とその子草壁と連合し、大津側の忍壁を陥れ、最終的に大伴勢も大津を見切り、大伴軍全体が都を離れた隙に大津を失脚させた(罪状は、父天武に対する謀反→大津には諡もなく、大津朝は「書紀」から抹殺された)</p> <p>※持統は、「書紀」では鳥羽皇女で天武の後=諡は高天原広野姫、ところが「続日本記」での諡は藤原宮御宇倭根子天皇。「元明詔」では、鳥羽は文武に位を授けて並び座して天下を治めた、「続日本記」では鳥羽を太上天皇としている→持統とは高市のこと ※「書紀」では、鳥羽はたびたび吉野に出かけたとあるが、実は吉野に隠棲していたのでは。「懐風藻」には、持統朝の次の文武天皇や藤原不比等の吉野宮での詩が載っている→持統朝の間日の目を見られない人々が、吉野の鳥羽を中心に、反高市=持統勢力を結集していたと思われる</p>	<p>673年 天武即位(唐が半島から撤退した隙を突き強行) 679年 天武・新羅文武王による両国内反対派の肅清、末子の草壁立太子 680年 唐による大津の立太子要求を天武は聞き入れず 682年 倭国の武力のうち物部は高市側、大伴は大津側にあり、天武のそばには少数の外交勢のみ→唐の差し金による大津のクーデターにより天武死 683年 大津皇子朝政~唐国勢の撤退により近江朝以来の高市勢の前に孤立していく 686年 大津刑死→この後、唐の推した大津の死に関して唐が介入 689年 草壁皇子没(天武朝以来の皇太子なので、大津没後直ちに即位したはずだが、高市の妨害で即位できなかった→この後高市は唐に認知を働きかけ、一応認知された) 690年 高市(持統)即位 696年 高市(持統)没 697年 文武即位 ※高市の持統朝を終わらせたのは、鳥羽を中心に吉野で結集していた文武天皇や藤原不比等の反高市=持統勢力。翌年鳥羽が文武を天皇に指名して、持統紀=「書紀」も終わる。 ※8世紀を目前に控え、「書紀」の編纂者である天武の皇子舎人親王や藤原不比等が倭国の治世を担当する時代に入る ※この時期、唐は国内事情から、周辺諸国への政治的・軍事的関与が困難に→日本国内で独自の天皇中心の国家観年が成立する機運醸成、その観念のもとで編纂されたのが「記紀」</p>